

主体的に本に親しむ児童の育成
～カリキュラム・マネジメントによる教育効果の見直しを通して～

犬山市立城東小学校 野村 実香

1 はじめに

本校は児童数700人ほどの大規模校であるため、低学年図書館と高学年図書館の2つの図書館がある。それでも雨の日には、本の貸し借りで行列ができるほどの人気である。行列ができると休み時間中に本を借りられない児童がいることもある。その一方で、晴れの日には外で遊ぶ児童が多く、図書館に通う児童が少なくなる。また、本が好きで図書館へ通う児童が固定していることが課題である。

令和2年度から施行された学習指導要領によるカリキュラム・マネジメントの指針は次の3つである。各学校においては、(1)児童や学校、地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと(2)教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと(3)教育課程の実施に必要な人的または物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくことに努めるものとする。

本実践では、学習指導要領にあるカリキュラム・マネジメントに基づいた活動を実施することで、多くの児童が主体的に本に親しむことを目指した。

2 研究のねらい

本に親しみ、楽しんで読書をしたり主体的に図書館を利用したりする児童を育てる。

3 研究の方法

(1) 教科横断的な視点での取組

- ① 年間指導計画による学校図書館活用教育
- ② 行事との関連実践

(2) 図書館利用活動状況の改善（PDCAサイクルの確立）

- ① すき間読書の推進
- ② 「読書の花を咲かせよう！」の取組

(3) 人的物的資源の確保

- ① 年2回の読書週間
- ② 図書館の整備

4 研究の実際

(1) 教科横断的な視点での取組

- ① 年間指導計画による学校図書館活用教育

学校図書館を授業でも活用するため、図書館活用のための年間指導計画を学年ごとに作成したく資料1>。国語科教育との関連はもちろん、学習・情報センターとしての役割があることを各担任が自覚し、年間を通して教科横断的な視点で図書館を活用できるように、他の教科との関連も考えて作成した。

ア 1年生の国語科の実践「じどう車くらべ」

「じどう車くらべ」で学習した後に自分が興味をもった自動車の図鑑を作った。自動車図鑑の書き方が分からない児童のために、「しごと」「つくり」についてまとめてから、本文を参考に説明文を書いたく資料2>。働く自動車について書かれた図書が学校図書だけでは数が少なく、全て「しごと」と「つくり」について書かれている訳ではないため、市立図書館の図書も活用することで対応できた。

イ 2年生の生活科の実践「生きものなかよし大作せん」

自分たちが捕まえた生き物を大事に育てるために、しっかり飼い方を知る必要があった。そのために、自分たちの知識だけでなく、図書館の本を活用して生き物の飼い方について詳しく調べた。子どもたちは積極的に図鑑で生き物について調べく資料3>、調べたことが実際に生き物の飼育に役立った。児童の中には図鑑に書かれている様々な飼育の仕方を試したり、図鑑によって書き方が違うので見比べたりして、生き物についての知識をより深めることができた。

ウ 3年生の国語科の実践「食べ物のひみつを教えます」

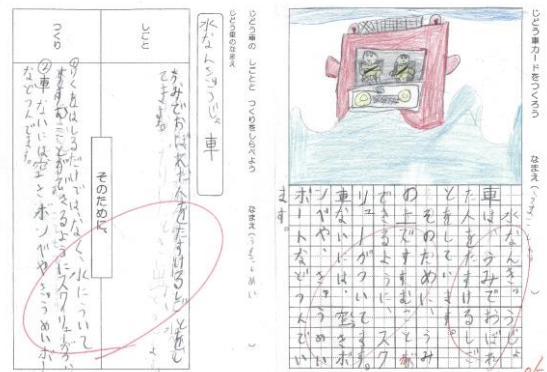
「すがたをかえる大豆」を読んで説明のしかたの工夫を理解し、それらを活用して、児童自身が人に伝えたいと思う食べ物について、説明する文章を書く単元である。材料の一つを選び、おいしく食べる工夫や食品の例を図書で調べた。自分の興味のある食べ物についての本を読んで調べ、「すがたをかえる大豆」の書き方を参考にして説明する文章を書くことができた。

エ 4年生の国語科の実践「事実にもとづいて書かれた本を読もう」

国語科「本は友達」では、小学校6年間を通じて、様々な観点から「本」「読むこと」「読書」について考える。4年生では、実際に起きた出来事や人々の取組の様子など、事実にもとづいて書かれた本（ノンフィクション）を読み、そこから学んだことを友達と伝え合う活

月	読書指導	情報やメディアを活用する学び方の指導
4	○読書のめあてを決めよう ・読書記録カード	○オリエンテーション(学) ○本は友達(国) ○図鑑の達人になろう ・漢字辞典の使い方(国)
5	○4年生のおすすめの本を読もう	
6	○あじさい読書週間に進んで取り組もう ・図書委員のおすすめの本を読もう	○里山について調べよう(総) ○わたしたちの体と運動(理) ・人のほねときん肉(モンキーワーク)
7	○読書感想文の本を選ぼう ・課題図書を読もう ・自分で選んだ本を読もう	・短歌・俳句に親しもう(国) ・新聞を作ろう(国) ○星や月(理) ・星の明るさや色
9	○夏休みに読んだ本を紹介しよう	○本は友達(国) ○事実にもとづいて書かれた本を読もう
10	○読書感想文を描こう ・指定図書を読もう ・自分で選んだ本を読もう ○青少年によい本をすすめる運動	○きょう土のはってんにつくす
11	○学びの力を高めよう	○山の中へ出かけよう

<資料1 年間指導計画(4年)>



<資料2 ワークシート>



<資料3 児童の様子>

動を行った。読みたい本を選んで読み、読んだ本のよさを、ポスターやポップ、帯などで紹介する方法を考えた。ポスターやポップ、帯という限られたスペースに書くことで、読み手を意識して短くまとめることができた<資料4>。さらに、友達の紹介した本を読むことで、自分の興味を広げることができた。



<資料4 児童の作品>

オ 5年生の理科の実践「人のたんじょう」

生命のつながりを学習するまとめとして、人の誕生についての調べ学習を行って学びを深める単元である。メダカや植物、日本モンキーセンターの出前授業と関連しながら、犬山市立図書館からも図書を借りて、調べたことを発表した。調べる素材は、本の他に、コンピュータ、博物館、保健室の先生、児童の保護者なども考えられ、工夫が必要である。

カ 6年生の総合的な学習の時間の実践「京都・奈良から犬山を見つめよう」

修学旅行の後に、京都・奈良にある寺社仏閣について調べるために図書を利用した。それぞれの見どころや歴史について画用紙にまとめ、5年生を招待して修学旅行報告会を実施した<資料5>。京都や奈良に関連する図書は豊富にあり、一つの寺社仏閣についても、複数の本で詳しく調べることができた。次に、犬山のまちについて、歴史伝統・観光・国際・福祉・環境の中から一つの分野を選択し、班ごとに図書を利用して、まちの様子について調べた。犬山のまちの情報に関する図書は数が限られていたため、福祉全般・自然環境全般についての図書にまで調べる範囲が広がっていった。調べた内容については、班ごとに画用紙や模造紙にまとめ、学習発表会で発表をした。



<資料5 発表の様子>

② 行事との関連実践

毎年読書感想文の時期になると課題図書を購入している。各学年分購入し、学級で担任が紹介して回覧した。夏休み用の図書を借りる前に図書館に置き、児童が借りられるようにした。他にも「青少年によい本をすすめる県民運動」にも取り組んでいる。課題図書を購入し、それぞれ担任が読み聞かせをした後に児童が感想文を書く。感想文の参加状況に応じて図書が贈呈されるため、直接児童に還元された。

(2) 図書館利用活動状況の改善（PDC Aサイクルの確立）

① すき間読書の推進

全校で週2回、朝の時間に読書に取り組んでいる。また、授業中、テストが終わった後や児童の作業時間に差ができた時、給食後などのすき間時間にも読書ができるように推進している。そのため、すぐに読書ができるように、図書袋を常に机の横にかけている<資料6>。

すき間読書を推進し、週に1回はクラスで図書館に通う習慣をつけるために、図書館利用の時間割も作成している。さらに、児童の読書状況を担任が評価できるように、月末に各担任に読書状況を配付している<資料7>。学級全体と一人一人の児童の読書状況を担任が把握することにより、学級で借りに行ったり読書量の少ない児童に声をかけたりすることができた。これによってPDC Aサイクルを確立し、児童の読書量を増やすことにつながった。



＜資料6 児童の図書袋＞

		4月	5月
1年1組	男	0	49
	女	0	79
	他	0	0
	計	0	128
1年2組	男	0	69
	女	0	99
	他	0	0
	計	0	168
1年3組	男	0	46
	女	0	78
	他	0	0
	計	0	124

＜資料7 クラス別読書状況＞

② 「読書の花を咲かせよう！」の取組

一年間に1人30冊の本を借りることを学校全体の目標としている。その中で「読書の花を咲かせよう！」という取組を行っており、図書館前には学年ごとの大きな木を用意している＜資料8＞。30冊読めたら花に名前を書いてその木に貼っていった。冊数によって色分けし、30冊でピンク、60冊で黄、90冊で赤、さらに120冊読めたらオーロラの花を貼ることができる。この取組によって、どれぐらいの児童が30冊の目標を達成しているのかを一目で把握できた。読書環境を整備することによって、児童の花を咲かせたいという気持ちをもたせることにつながった。



＜資料8 読書の花＞

(3) 人的物的資源の確保

① 年2回の読書週間

一年間に2回、6月のあじさい読書週間と11月のどんぐり読書週間に取り組んでいる。読書週間は2週間実施し、この期間中は児童が1日に借りられる回数を増やしている。また、児童が本に親しむことができるように、身の回りの読書環境の整備を進めている。その主な取組について紹介する。

ア 図書委員おすすめの本の紹介

図書委員がおすすめの本の紹介カードを書き、本と一緒に図書館前に掲示した＜資料9＞。どんな本を読んだらよいのかわからない児童にとっては読書の手がかりとなった。また、読書が好きな児童にとっても、普段読まない本を手に取り、読書の幅を広げるきっかけとなった。友達や高学年のお兄さんお姉さんが紹介することで、普段読んだことがない本でも読んでみようという意欲をもって読むことにつながった。



＜資料9 高学年向けおすすめの本＞

イ ペア読書

読書期間中には、高学年児童がペアの低学年児童に本の読み聞かせを行った<資料 10>。高学年児童は相手意識をもって自分のペア児童のために本を選び、読み聞かせの練習をした。低学年児童は高学年児童が自分のために選んでくれた本に親しむことができた。普段自分が選ばないような本にも出合うことができる機会となった。



<資料 10 ペア読書の様子>

② 図書館の整備

年間指導計画による学校図書館活用教育を進めていることから、国語科と関連する図書を配架するコーナーを設けている。国語の教科書には必ず単元の最後に「この本、読もう」で関連図書が掲載されている。また、教科書の最後に「本の世界を広げよう」で図書が掲載されている。図書館の図書にその学年の数字シールを貼り、すぐに見てわかるように配架してある<資料 11>。



<資料 11 国語科との関連図書>

本校には、低学年図書館と高学年図書館の2つの図書館がある。以前の低学年図書館は校舎の中央ホールにあり、中央ホールの脇に分散して児童用図書を並べていた<資料 12>。しかし、児童数減少のため空き教室ができ、さらに今後も児童数減少が予想されることから、その空き教室を低学年図書館として整備した。開けた場所で人が行き交う雑多な中で読書をしていた環境から、落ち着いた空間で読書ができる環境に生まれ変わった。具体的な方策としては、床全体にカーペットを敷き、座って読書ができる温かみのある空間にした<資料 13>。職員の協力を得て低学年図書館の本を全て出し、新しい低学年図書館となる空き教室に配架した。



<資料 12 以前の低学年図書館>

図書館の本は、作品名順に並んでいたが、図書ボランティアの方や委員会の児童にも協力してもらい、著者名順に並び替えた。請求記号ラベルにも本の著者の頭文字がついているため、その方が分かりやすく、著者名順にすることでシリーズ作品がそろそろ利点があると考えた。

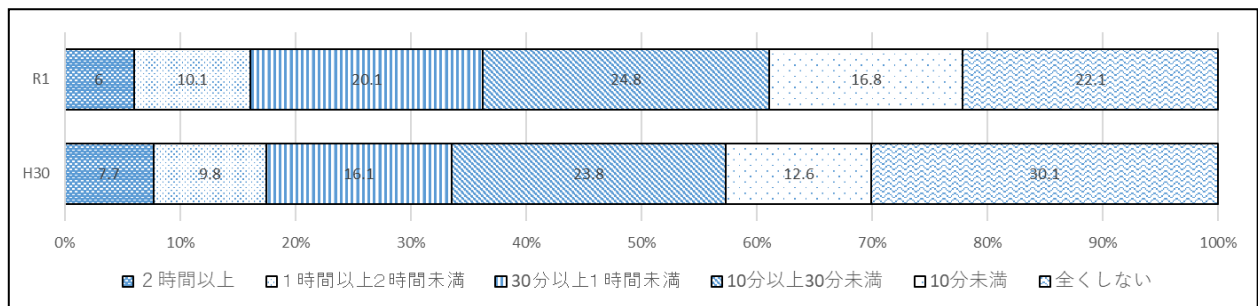


<資料 13 新しい低学年図書館>

5 成果と今後の課題

教科横断的な視点での取組の成果として、国語科との関連で図書館を活用する場面が多かったが、図書館活用の年間計画を立てたことで、他の教科でも活用できるようになった。朝の読書タイムには、ほとんどの学級で落ち着いて読書ができています。各担任の声かけから、すき間読書の習慣も身に付いてきている。その結果、学校全体が落ち着いた雰囲気になってきた。さらに、毎月1回の貸出状況の様子を配付することによって、週に1回の図書館時間割に沿って図書館を利用し、学級全員で図書館に行くことが増えた学級もあった。また、全国学力・学習状況調査の児童質問紙において、前年度より読書時間が増え、少しずつではあるが成果が表れている<資料14>。人的物的資源の確保については、児童の身の回りの読書環境を整備することによって、意欲的に読書に取り組む児童が増えた。その結果、一人当たりの年間貸出冊数は、一年間で27冊から38冊に大幅に伸びた。さらに、読書週間でおすすめの本を掲示したりペア読書を行ったりすることによって、読書の幅を広げることにつながった。また、低学年図書館の環境整備を大幅に行うことで、カーペットの上でゆったりと過ごす児童の様子が見られた。人的物的資源を確保し、整備することによって、児童の読書状況にも大いに関わってくると感じた。

今後の課題は、学年や担任によってまだまだ図書館利用に差があることである。学年や学級で差が出ないように、図書館担当として、もう少し全体に働きかける必要があると感じている。また、学校図書館だけでは蔵書数が限られているため、市立図書館との連携を図り、活用していかなければならない。しかし、同じ時期に他の学校も同じように市立図書館で借りるため、図書が足りないということも課題である。行事との関連については、各担当教諭と連携して図書の活用をしていく必要があるように感じた。さらに、読書量が少ない児童への声かけなどによって底上げを図ることはできたが、2時間以上読書する児童が減っていることが分かる<資料14>。「読書の花を咲かせよう！」の取組によっても主体的に取り組む児童が増えてきたが、高学年にとっては低学年に比べるとその効果が薄いように感じられる。読書好き児童をさらに増やせるような工夫が必要になってくると感じた。



<資料14 学校の授業時間以外に、普段（月～金），1日当たりどれくらいの時間，読書しますか（教科書や参考書，漫画や雑誌は除く）>

6 おわりに

図書館運営に関わり、本に親しみ、楽しんで読書をしたり主体的に図書館を利用したりする児童を育てるためには、担任や図書館司書との連携が非常に大切だと感じた。今後もカリキュラム・マネジメントによる教育効果を意識しながら、本に親しみ、楽しんで読書をしたり主体的に図書館を利用したりする児童の育成を図っていきたい。